

研 究 紀 要

[5 2]

令和2年3月

大阪府立中央聴覚支援学校

目次

1. 校内研究会報告 …サポート部
2. 子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり …幼稚部
3. 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～ …小学部
4. 総合学習における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて …中学部
5. 【アクティブラーニングの視点を取り入れた教科指導について
国語科（百人一首大会）】 …高等部
6. 【アクティブラーニングの視点を取り入れた教科指導について 理科「物理基礎」】
…高等部
6. 『自分の命を自分で守る行動』を共に考える
～日常生活の中で防災・防犯意識を高めるために～ …寄宿舎
7. <第52回全日本聾教育研究大会（北海道大会）>
子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり …土口 真奈

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

校内研究会報告

サポート部

研究テーマ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み

1 第1回校内研究会

- (1) 日時 令和元年8月19日(月) 9:15~12:00
- (2) 講師 金沢大学 武居 渡 教授
- (3) テーマ 聞こえない子どもにとっての主体的・対話的で深い学びとは
- (4) 要約

講演前半では、新学習指導要領で求められていることを「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」にわけて論理的に学び、子ども自身がこの授業で何を学ぶのかを理解していることの重要性を確認した。

後半は、聞こえない子どもの語用論的課題を切り口に、学びあう集団、考える授業計画を柱とする、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの実践について考えた。そして、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みは、子どもたちが思考に使える言語を身につけるという大きな目標につながっていく実践であるべきだという認識を全教職員で共有することができた。

2 第2回校内研究会

- (1) 日時 令和2年2月10日(月) 16:00~17:00
- (2) 研究発表

① 中学部 総合の授業を通じた「生徒の主体性・対話性・深い学びの変化について」

発表者 大山 遼太郎 先生

中学部の生徒が総合学習のなかで「主体的・対話的で深い学び」を実践し、アンケート調査からその効果を分析した。発表活動は、発表までの過程で生徒が他者の意見に触れ、考えを広げ、内省することから、深い学びにつながるとわかった。

② 高等部 保健体育科 実践報告

発表者 中塚 絢子 先生

運動会で発表したダンスを通して、生徒に考える力をつけさせる活動を行った。曲の選択、連取時間の工夫、陣形、伝達方法など、細部にわかって生徒が話し合い、自分たちで決めていく作業が生徒の主体性を高めた。

③ 寄宿舎 「自分の命を自分で守る行動」を共に考える

- 日常生活の中で防災・防犯意識を高めるために -

発表者 中垣 修 先生

自治会のなかで、舎生自身が命を守る行動について主体的に考えられるよう支援した。自分自身で考え、体験したことを発表し、お互いに話し合うことを重ねた。そして、舎生と職員と一緒に防災・防犯について考えられる環境作りに努めた。

※研究内容の詳細な報告は、各部報告にて掲載

子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり

幼稚部

1 はじめに

幼児期は人の一生において、人間形成の基礎が培われる大切な時期である。幼児は遊びの中で主体的に対象にかかわり、自己を表出し、他人の存在に気づくなど、自我が芽生えるとともに、自己を取り巻く社会への感覚を養っていく。

このことから様々な発達段階や聴力の状況など幼児の実態が多様化している幼稚部において、個々の実態を把握し、集団の活動の中で一人ひとりの持っている力を引き出すことが求められていると考える。

今年度は、昨年度の研究を通して共通理解した次の「主体的・対話的で深い学びの観点」をもとに保育を計画し、実践することで教員の保育力向上を図り、幼児教育の質を高めることができるのではないかと考え、研究を進めた。

主体的な学びの観点

- ・子どもが自ら活動に参加し、取り組もうとしているか
- ・子どもが活動の流れを理解し、活動したことを振り返ることができているか
- ・子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できているか

対話的な学びの観点

- ・他者とコミュニケーションをとることで、子どもが考え方の視野を広げることができているか

深い学びの観点

- ・子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できるために、教員が働きかけ、子どもが考えようとしているか

2 研究の目的・計画

幼児教育や幼児の観方を見直し、共通理解をする



- 計画（１）主体的・対話的な観点をふまえた指導案を作成する。
- 計画（２）保育者が指導案を作成し、内容について全体で共通理解をする。

幼稚部教員の保育力の向上 『質の高い保育』をめざす



- 計画（３）研究保育を実施する。
- 計画（４）研究保育をもとに「主体的・対話的」な保育について協議を行う。

保育における主体的、対話的な観点について共通理解をする

- 計画（５）協議内容をふまえて、研究保育を実施する。
- 計画（６）「主体的・対話的」な観点について整理、共通理解をする。

3 研究内容

- (1) 指導案を作成するにあたって、「主体的・対話的な観点」を意識できるように 9. (2) 本時の活動の流れの『保育者の援助』の欄に、主体的な活動を★、対話的な活動を●と区別して表記するように共通理解をした。次に示したものは実際に使用した指導案の様式である。

保育指導案

保育者 ○○ ○○
○○ ○○

- 1. 日時 令和○年○月○日(○) ○時○分～○時○分
- 2. 場所 ○歳児 ○組保育室
- 3. 対象幼児 ○歳児 ○組(○名)
- 4. 活動名 「○○○○○○○」
- 5. 活動のねらい
 - ・
 - ・
 - ・

6. 幼児の姿(生活・健康・興味・関心・人間関係等)

7. 活動設定の理由

8. 活動の指導計画(全○時間、本時は第○時) ※ 必要に応じて

時	ねらい	主な活動内容

9. 本時の展開

(1) 本時のねらい

- ・ △△△・・・・・・
- ・ ◇◇◇◇・・・・・・
- ・ ○○○・・・・・・

(2) 本時の活動の流れ

時間	活動内容	保育者の援助 (★主体的な活動 ●対話的な活動)
○分 導入		
○分 展開		
○分 まとめ		

(3) 活動環境の配置等(正面を上にして、幼児や保育者の位置、準備した教材・教具の位置等を示す)

(4) 本時の評価

-
- ◆◆◆.....
- ▲▲▲.....

(2) 指導案を作成し、研究保育を実施した。また保育についてグループにわかれ、「子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子」「保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）」という視点で協議を行った。次に示したのは指導案の一部を抜粋したものと協議内容である。

① 早期教育相談 2歳児 『朝のあつまり』

ア 指導案より抜粋したもの

本時の活動の流れ

時間	活動内容	保育者の援助 (★主体的な活動 ●対話的な活動)
10分 導入	<ul style="list-style-type: none"> 音遊び (歩く・止まる・馬・どんぐり) 座る位置にイスを運ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 教員や保護者も一緒になって体を動かし、楽しい雰囲気をつくる。 頑張っている姿をほめ、意欲的にとりくめるようにする。 ★●教員や友だちを見ながら、自分なりに体を動かそうとしているか。 絵カードや手話、指さしなどを手がかりにできるよう様子を見ながら示し、できるだけ自分たちでイスを運べるよう見守りつつ促す。 ★活動の流れに見通しをもち、絵カードや手話、指さしなどを手がかりにイスを運べるか。 ●保護者へ共感の視線を送っているか。それを保護者が受け止めているか。
15分 展開	<ul style="list-style-type: none"> はじまりのうたを歌う 朝のあいさつをする お返事カードをする 次の予定を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの顔が見える位置に座れているのか気をつける。 その日の子どもの状況によって、離席したり気持ちが崩れたりすることを考慮し、T2、T3と連携を取りながら対応する。 ★●教員や友だちを見ながら手話や身ぶりをつけ歌おうとしているか。 少し間を取りながら、教員の方を見ているか確認してからあいさつをする。 ★●本人なりの方法(手話・音声・身振り)であいさつしようとしているか。 教員の方を見ているか。 だれが呼ばれるのか期待感が持てるようカードの見せ方を工夫する。 T2が手本を示し、やりとりの仕方を知らせる。 ●教員の話聞きながら、写真カードの友だちを探そうとしているか。 お返事カードが済んだ事で気持ちが途切れている子どももいることを考慮し、次の活動については短時間で知らせる。

イ 協議内容

子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子	保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）
<ul style="list-style-type: none"> ★朝のあつまりという繰り返し経験している保育だからこそ、主体的に活動している。 ●椅子を取りに行くときに教員を見る仕草があった。対話の芽生えではないか。 ●伝えたいことがあるときに保護者が近くにいることで伝えられる環境がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ●★幼児が手話や身振りで伝えたことに対して共感する雰囲気できていた。 ●保護者に対して子どもへの関わり方について声かけや促しがあることで次につながる。 ★教員を見るまで待つなど、視線の向け方に気をつけることが主体的な活動への促しになる。

② 3歳児 『劇遊び』

ア 指導案より抜粋したもの

本時の活動の流れ

時間	活動内容	保育者の援助 (★主体的な活動 ●対話的な活動)
10分 導入	前回の活動を振り返る。 絵本のストーリーを思い出す。	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の劇遊びの内容を思い出せるよう、話をする。 ・絵本を見せながら、ストーリーの展開を知らせる。 ・ストーリーを思い出して話しをする幼児がいれば、他の幼児にも知らせ、全員で共有できるようにする。 ★前回の活動を振り返り、本時の活動に期待を持っているか。 ●友だちや教員と一緒にストーリーについて思い出す。
35分 展開	役を決める。 劇遊びをする。 ・役になりきって台詞を言う。 ・気持ちや状況を表現する。	<ul style="list-style-type: none"> ・登場する役を知らせる。 ・やりたい役を選び発表するよう促す。同じ役が重なったときは、他の役の楽しさを伝えやってみよう促す。 ★やりたい役を自分で選ぶことができるか。 ●友だちがやりたい役を知り、誰が何の役をするのかみんなと一緒に知ろうとすることができるか。 ・役が分かりやすいようにそれぞれの役の帽子を知らせ、被るよう促す。 ●役になりきってやり取りを楽しんでいるか。 ●友だちと一緒に表現することを楽しんでいるか。 ★場面に合った台詞や表現を自分なりに考えて表現しようとしているか。

イ 協議内容

子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子	保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）
<ul style="list-style-type: none"> ★同じ題材で繰り返し劇遊びを行っていることで、子どもがイメージをもって取り組んでいる。 ★やりたい役を子どもが選ぶことで、主体的に参加しようとしている。 ●会話はなくても友だちと同じ役をすることで対話的な活動になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ★初めに選んでいた役から他の役に変更したいと子どもが発言したときに、受け止める姿勢があった。 ●教員も一緒に役になりきることで、教員を介してではあるが子ども同士の対話に繋がっていた。

③ 4歳児 『ボール遊び』（3歳児・4歳児・5歳児全員で行った保育である）

ア 指導案より抜粋したもの

本時の活動の流れ

時間	活動内容	保育者の援助 (★主体的な活動 ●対話的な活動)
10分 導入	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ。 ・「中央体操」をする。 ・活動内容をイメージする。 ・「ぼーる」を指文字や手話で表わす。 ・活動内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスカードを使い、教員に注目させる。 ・手を広げ、間隔をとるように促す。 ・何を使うか子どもに考えさせ、期待がもてるようにする。 ・絵カードや文字カードを提示し、確認を促す。 ★ボールを使って遊ぶことを知り、期待をもつことができているか。
30分 展開	<ul style="list-style-type: none"> ・4～5人でグループになる。 円をつくりボールをまわす。 ボールを転がす。 ※様子を見て、転がす距離をのばす。 ・3グループに分かれて「ころがしドッジ」をする。 <ルール①> ・線の外側からボールを転がす。(赤帽子) ・円内のみで逃げる。(白帽子) ・ボールが当たったら、円から出て応援する。 【△の場所で応援】 <ルール②> ・幼児は線の外側から転がす。(逃げる) ・教員は円内で逃げる。(転がす) ・ボールが当たったら、円から出て応援する。 A：もも・ばら (ルール②) B：さくら (ルール①) C：ひまわり・たんぼぼ (ルール①) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が手本をみせ、見通しをもたせる。 ・自分たちで4～5人のグループになれるよう声かけをする。同時に絵カードを提示し、主体的に行動をできるように促す。年中・年長児は年少児の友だちを探すよう声をかける。 ・教員が輪の中に入り、ルール理解を促す。 ★絵カードを手がかりに、子ども同士でグループをつくるができているか。 ●友だちを意識してボールを転がすことができているか。 ・手本を見せ、ルール理解を促す。 ・帽子を色分けすることで、自分や友だちの役割を確認させる。 ・1回戦終了後、ルールを理解して遊んでいた幼児の例を紹介し、他児に知らせる。 ・グループの中で中心となる教員を決め、幼児の実態に合わせてルールを考える。 ● 帽子の色を見て、自分や友だちの役割を理解することができているか。 ★ ルールを理解して、「ころがしドッジ」を楽しんでいるか。

イ 協議内容

子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子	保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）
★合同保育なので、学年によって主体性は様々である。3歳は活動に参加する、4歳はルールを理解する、5歳は遊びを子ども同士で共通理解して楽しんでいる様子があった。	★子どもの発達段階によってグループ分けをしたことで主体的な活動になった。 ★良かった点を明確に伝えることで、子どもの自信や次回への意欲につながっていた。

(3) (2) で示した協議内容をふまえて、指導案を作成し、研究保育を行った。また保育後、同様に「子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子」「保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）」という視点で協議を行った。次に示したのは指導案の一部を抜粋したものと協議内容である。

④5歳児 『思い出を振り返ろう』

ア 指導案より抜粋したもの

本時の活動の流れ

時間	活動内容	保育者の援助 (★主体的な活動 ●対話的な活動)
15分 導入	○『幼稚園の思い出』について知る。 ・どんな行事やできごとがあったかをスライドショーを見て振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・『思い出』とは何かを考えることができるように話をする。 ・『思い出』がイメージできるように、スライドショーを見せる。 ・スライドショーを見て、気づいたことや感じたことを話させることで、他の幼児にも共有できるように声かけをする。 ★スライドショーを見ながら、1年間の行事やできごとについて振り返りができるか。 ●友だちや教員と一緒に行事やできごとを思い出すことができるか。
20分 展開	○『幼稚園の思い出』について話をする。 ・楽しかったことやおもしろかったことなどを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・季節に沿って行事やできごとを振り返ることで、楽しかったことや面白かったことなど具体的に発表できるようにする。 ・“どんなところが”“何を”など友だちや教員に伝わる発表をするように促す。 ・発表したことを友だちと共有できるように、発表した内容を簡単なことばや身近な手話に置き換えて提示する。 ・適宜行事の写真などを提示し、発表しやすい環境を作る。 ★自分なりに考えて、発表をしようとしているか。 ●友だちの発表を聞こうとしているか。

イ 協議内容

子どもが主体的・対話的に活動している場面、様子	保育者の指導・支援（主体的・対話的に繋がる）
<ul style="list-style-type: none"> ●★写真を手がかりに子どもたちそれぞれのことばで発言をしていた。 ★写真には映っていない出来事も思い出すことができていた。 ●友だちの発言をきいて、関連づいたことを伝えることができていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●子ども一人ひとりの発言をピックアップすることで、対話的な活動に広がった。 ★子どもの発達段階によって質問の仕方を変えることで、子どもそれぞれの発表をすることができていた。 ★T.Tの体制をとって支援することで、全ての子どもが思い出を振り返ることができていた。

4 考察とまとめ

今年度は昨年度の課題をふまえて全学年が「主体的・対話的な観点」を組み込んだ保育を行うことができた。その結果、子どもの発達段階や各学年、年齢に応じた「主体的・対話的な観点」を整理することができた。

早期教育相談では、保護者が子どもと関わりながら過ごすことができる環境であるため、子どもがすぐに感情や欲求を身近な人に動きやことばで伝えることができる。それは、子どもが「主体的・対話的」に活動する一番初めのきっかけであると考えた。

3 歳児では、早期教育相談で培われた大人とのやりとりを経て、教員を介して活動に参加する、物事を選択するといった行動で主体性を表したり、教員や友だちとの対話につながったりすると考えられた。

4 歳児では、活動に繰り返し参加することでルールを理解したり、友だちを意識してともに遊んだりすることで、同学年の友だちをはじめ、少しずつ他者との関わりを広げていき、主体的に活動に取り組んでいくと考えた。

5 歳児は、活動に対してのルールや約束事を友だち同士で共通理解したり、思いや考えを教員や友だちに伝えたりすることで、人間関係の視野をさらに広げ、集団の中での自己を確立していくのではないかと考えられる。

幼稚部全体で「主体的・対話的な観点」を見直すことで、年齢や発達段階が増すごとに「主体的・対話的」な子どもの活動は変化し、また連続性があることに気づくことができた。しかし、その連続性が確立するためには保育者が子どもの実態をしっかりと把握し、幼児教育への視野を広げることが大切である。今回の研究で定期的に研究保育を行い、協議を行ったことで、子どもの実態に応じた保育をするという意識が強まったように感じる。一方で、子ども自身が「深い学び」に繋がったという実感を得ることがまだまだ難しかった。今後は子どもが「主体的・対話的な学び」に繋がるとような保育を引き続き実践していくとともに、「深い学び」に発展できるような保育への観点を整理し、実践していきたいと考える。

主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～

小学部

1 はじめに

平成29年3月に改訂された学習指導要領を受けて、本校では昨年度より学校全体でアクティブラーニングの観点を踏まえた「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの大きな柱をもとに研究を進めた。

地域の学校における主体的・対話的で深い学び（以下、三つの学び）については、様々な研究がなされているが、聴覚支援学校での三つの学びについての研究は発展途上の段階にある。そこで本校小学部では、昨年度から聴覚支援学校独自の三つの学びの傾向、およびその指導事例を集約しようと試みた。具体的には、小学部の教員全員が各自で研究授業や公開授業に取り組み、指導案の中に三つの学びにどのように迫るかを明記してもらうことにした。その際に、主体的な学びは●、対話的な学びは■、深い学びは◆と、どの指導内容がどの学びにあてはまるのかがわかりやすいように記号を充てた。また、アドバイスシートでもその観点を達成するための指導が適切かどうかを記入できるようにし、研究テーマの本質に迫ることができるように進めた。研究テーマを教員全体で取り組んだことにより、三つの学びに迫るための指導事例を蓄積することができた。また、各々の授業者が考える三つの学びにどのように迫るかについて、幅広い指導事例を学部内で共有することができた。しかし課題として残ったのは、その事例の中から聴覚障がい児の三つの学びの達成につなげていく有効な指導を見出すことが困難だったことである。この理由としては、三つの学びに対する解釈が授業者の間で異なる認識を持っており、そのため学びを達成する指導の幅も多岐にわたり、これをまとめることが困難だった点にある。そのため、三つの学びを具体的に細分化した観点の導入が必要であると考えた。

そこで、今年度からは独立行政法人教職員行政機構が提唱する「アクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム（資料1）」から観点を導入して進めることにした。このピクトグラムは三つの学びをそれぞれ細分化し、具体的な学習活動の観点を示したものであり、「主体的な学び」は5つの観点、「対話的な学び」は7つの観点、「深い学び」は7つの観点が提示されている。昨年度の指導案の形式は、●■◆の記号を併記することで三つの学びのどの学びに迫るための指導であるかを明確にしたものであったが、この5・7・7の観点を導入することによって、授業者が考える“三つの学び”に迫る具体的な指導についてより明らかになると考えた。そのため今年度の指導案の形式に変更を加え、全教員が実践を継続して深めることにした。

また、今年度も発達段階や特性がそれぞれ異なる児童の実態を把握し、授業の中で一人ひとりの力を引き出す指導を実践するために、指導案はA（学習グループ内で課題が共通しているグループ用）とB（課題に差があるグループ用）の2つの形式を用いて研究を進めた（資料2）。

2 研究活動の概要

(1) 小学部教員全員による研究授業

今年度も昨年度と同様、年次研修対象者は指導案を、その他の教員については指導略案を作成して研究授業を行った。学部内で参観することによって、小学部全体の指導力や研究テーマを踏まえた授業について研鑽する体制を構築した。

(2) 指導案と授業評価の充実

研究主題を達成するために、指導略案の中に、ピクトグラムの観点からどのように授業を進めるかを書く箇所を設けた。さらに、本時の展開で前述した3つの観点（●■◆）を挿入することで、どの学習活動が三つの学びに結びつけることができるかがわかるようにし、研究主題の達成の方法が伝わるように工夫した。

また授業を参観する際には、アドバイスシートを用いて、基本的な授業技術、環境のチェックや、研究主題にどれだけ迫ることができたかの評価、コメントによるアドバイスの記入を行った。指導案に明記した研究主題の達成に向けてのピクトグラムの各項目に対する評価欄を新設し、研究授業の振り返りの際に活用し、今後の指導にいかしていく機会とした。

(3) 学習会

小学部全員で行う学習会を1学期、3学期の全2回実施した。内容は次の通りである。

第1回…「聴覚支援学校小学部における主体的・対話的で深い学びの実現」

独立行政法人教職員支援機構オンライン講座

校内研修シリーズ No.25 : 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

第2回…「KABC-II検査分析結果と実践報告」

本校小学部 吉野あゆむ教諭、第二学年担任

「小学部 研究のまとめ」

小学部 サポート部研究グループ

(4) 若手教員の会

若手教員の会は、今年度も新採用5年目以下の教員を対象に3回の研修会を実施した。昨年度同様、対象者を3グループに分け、各研修会の企画、準備、運営、アンケート集計等をグループのメンバーで分担しながら進めた。第1回研修会は、「保護者に安心してもらえる対応をめざして」をテーマに、保護者とのメールでのやりとりや、礼儀作法についてディスカッションを行った。具体的な事例を題材にすることで、さまざまな意見を交換し合えることができた。さらに、教員として留意しなければならないマナーを改めて考える機会となったといえる。第2回研修会は、「聴覚支援学校における体育指導について～教員が安全に指導をするために気をつけること～」をテーマに中学部の安藤学主席を講師として迎え、「なぜ？」という疑問を提議する姿勢もちながら授業を進めていくことの大切さを学ぶ機会となった。また、授業中に疑問を提議しながら進めたり、授業後に「どうしてうまくいったのか（うまくいかなかったのか）」を考えたりすることによって、自分で授業について振り返るだけでなく、他の教員にアドバイスを求めるきっかけになり、授業の質を向上させることに結びつくことを学ぶ機会となった。第3回研修会については、第2回研修会と同じく中学部の安藤学主席から「授業や学校業務のことと、これからの組織運営」についてご講話いただいた。自分の行動を振り返ること、何が問題か気づくために常にアンテナを張り巡らせておくこと、組織の一員として動くことを自覚すべきことなど、大切なことを改めて学ぶ研修会となった。

3 研究活動の成果と課題

(1) 本校小学部における「主体的・対話的で深い学び」について

指導案の中に授業実践事例（ピクトグラム）の観点を盛り込むことにより、聴覚支援学校における授業実践について、一定の傾向がみられる結果となった。（図1）具体的な指導事例は表1に列挙している。

主体的な学びでは、“興味や関心を高める工夫”が最も多かった。教科書を元にしたリライト教材（手話イラスト入り）を使って学習を進めることで、児童が授業や家庭学習に意欲的に取り組む姿がみられた。また、児童の実態に合わせた題材を用意し、それぞれの生活体験について話し合いをすることで興味や関心の喚起につながった事例もあった。“見通しを持つ”指導では、これまで学習した内容の振り返りを丁寧に行ったうえで、本時の目標を意識させることで課題解決への見通しを持たせることができた例もあった。引き続き、児童が興味をもって学習に取り組み、自分の考えをもつことができるような手立てを考えていきたい。

対話的な学びの、“思考を表現に置き換える”指導では、児童が自身の考えを相手に伝わりやすいことばに整理してから伝えようとする姿がみられた。また、比喩表現や擬音語が何を表しているのか、どういう様子なのかを児童に劇化させることによって、文章読解の一助となった事例もあった。“互いの考えを比較する”指導では、ミニホワイトボード、ワークシート、付箋（KJ法）などを使用して、意見をわかりやすくすることで相手の考えを知り、自身の考えとの比較をすることができた。一方で、授業の中で指導者と児童の1対1のやり取りで終わってしまったり、TTが児童の話に入りすぎて、TTが主導してしまったりする例もあった。児童の実態を見極めながら、児童同士で学び合う学習活動のあり方を工夫していく必要がある。

深い学びについては、“知識・技能を習得する”“知識・技能を活用する”指導を多く行った。その指導事例を挙げると、イラスト化した助詞カードを児童に活用させることで、定着が難しい

文法の理解を促すことができた授業もあった。また、算数科の学習内容を活かして、自分で絵と文章の問題を作る課題に取り組みさせることで、内容の理解を深めることができた例もあった。“自分の考えを形成する”指導では、児童の実態に合わせて手話・身振り・表情など駆使しながら、人物の気持ちや様子を想像させており、児童が生き生きとした表情で発表し合う姿がみられた。深い学びについては、今後も学習した内容を積み重ねて、児童自身で活用・応用ができるように指導を工夫していきたい。

(2) 今後に向けて

前述のように、ピクトグラムの観点を導入することによって、三つの学びを達成する多様な指導事例について、ある程度細分化することができ、事例の中で授業者がどういう観点で指導に取り組んでいるかが明らかになったと思われる。また、三つの学びの各々の観点の中で授業者がどのように指導したか、その指導方法・技術についても同様に蓄積することにつながったと思われる。しかし、聴覚障がい児における三つの学びに迫る指導については、事例の件数が不足するためにその傾向及び有効性を断定するには正確性に乏しいところがある。そのため、来年度も引き続き同様の観点を盛り込んだ指導案による実践を全教員で取り組んでいき、より充実した事例の中で三つの学びに迫るような指導について考察していきたい。

図1：本校の授業実践事例の傾向

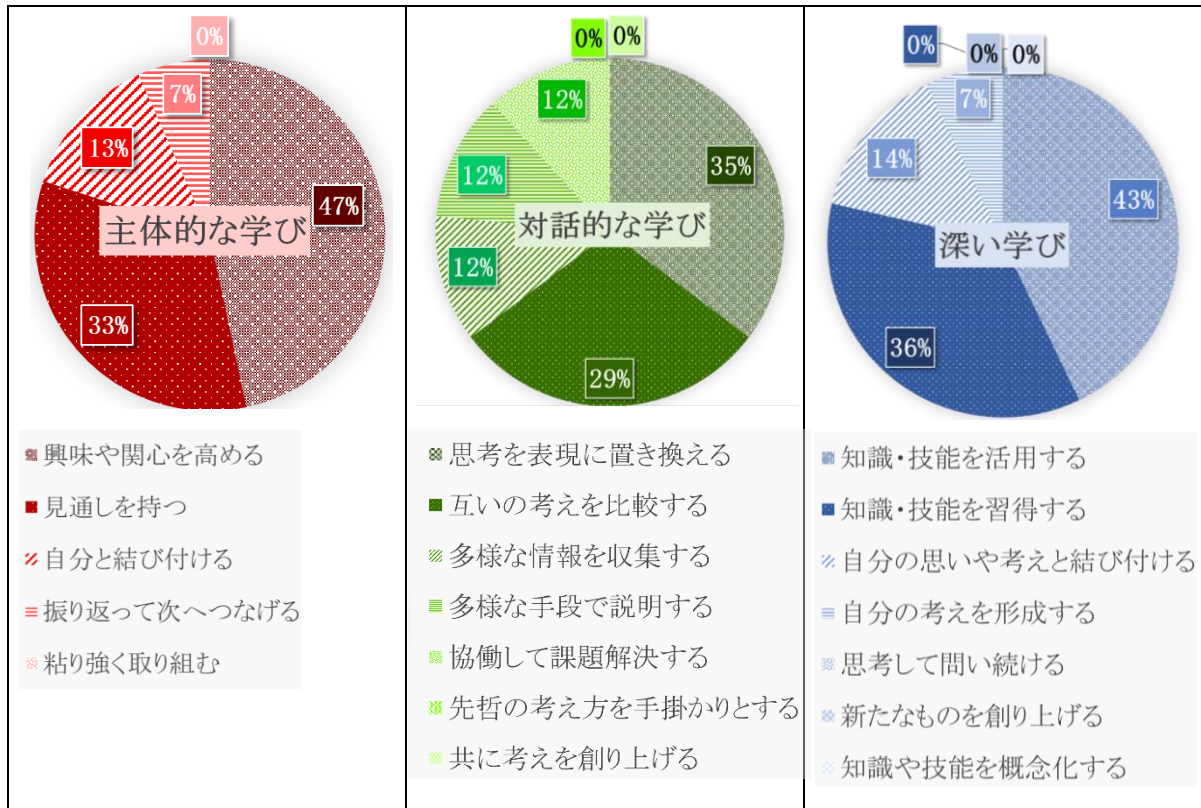


表1：本校における三つの学びの指導事例

● 主体的な学び	興味や関心を高める	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にあることばから例を探させる。 ・子どもたちが興味のある題材を取り上げる。 ・あいうえお体操に意欲的に取り組む。 ・くっつきキャラクターカードに関心を持っている。 ・身近な題材をテーマとして取り上げる。 ・写真を提示する。 ・見本を見せたり、制作方法を説明したりする。
	見通しを持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・九九を活用することで答えが求められる場面から、九九の構成の必要性に気づき、本時のめあてを意識させる。 ・包含除の計算手順が、既習の等分除の手順と似ていることに気づかせ、本時の見通しを持たせる。 ・問題文の情報を整理してから課題に取り組みさせる。 ・自分の行動を中心に想像を広げながら読む。 ・めあてや制作方法を説明する。
	自分と結び付ける	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の生活体験とつなげながら課題について考えさせる。 ・学校や家庭生活の中での場面を設定し、場面の中で、児童が普段どのような言葉を使用しているのかを振り返らせる。
	振り返って次へつなげる	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで読んできた内容を振り返り、本時のめあてを再確認する。







■ 対話的な学び	思考を表現に置き換える	<ul style="list-style-type: none"> ・九九の構成の仕方をことばで発表させる。 ・等分除と包含除の手順が分かる写真を対比させ、その違いから包含除の計算式を発表させる。 ・手話、指文字、音声などいろいろな表現手段を用いて、わかりやすく伝わる方法を考え、やりとりをする。 ・で（場所を）を使った文にあう手話表現をしている。 ・考えたことを話したり動作化させたりする。
	互いの考えを比較する	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの考え方の違いに着目させる。 ・登場人物の様子がわかる場所を確認し、気持ちを考えさせる。 ・課題解決に向けて話し合いをする。 ・作成したポスターを用いて、お互いの考えを知る。 ・例題に対する考えをグループで話し合わせる。
	多様な情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのつぶやきや指導者のヒントから、ことばの例を思いついたり、教えてもらったりする。 ・教科書に書かれてある文章や図などの資料から情報を収集する。 ・自分の作品の紹介をさせ、友だちの作品紹介を聞かせる。
	多様な手段で説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちに自分の意見を伝え、書記させる。 ・手話、指文字、音声などいろいろな表現手段を用いて、わかりやすく伝わる方法を考え、やりとりをする。
	協働して課題解決する	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと協力して、たくさんのことばの例を集める。 ・おっとっとの形あてに友だちと協働して取り組む。
◆ 深い学び	知識・技能を習得する	<ul style="list-style-type: none"> ・名詞の特徴、種類を知る。 ・指導者からの助言や、友だちとのやりとりを通じて、いろいろな伝える方法を知り、実際の場面で活用する。 ・で（場所）の使い方を知る。 ・文や文章にはいろいろな構成があることを知る。 ・3種類の敬語と使い方を伝える。
	知識・技能を活用する	<ul style="list-style-type: none"> ・既習した内容を活用して課題に取り組みさせる。 ・自分の知っていることばから名詞をさがし、集める。 ・指導者からの助言や、友だちとのやりとりを通じて、いろいろな伝える方法を知り、実際の場面で活用する。 ・既習内容を活用してから課題に取り組みさせる。 ・資料を適切に選び、活用する。 ・学習した敬語を例題の中で活用させる。
	自分の思いや考えと結びつける	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに沿って自分の考えを整理しながら、付箋に考えを書く。
	自分の考えを形成する	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の内容と自分の経験を結びつけて考えをまとめ発表し合う。 ・友だちの意見をきいたりしながら、自分はどう考えるかを発表する。

(2) 今後に向けて

今年度はピクトグラムの観点を導入することで、三つの学びを達成するために授業者がどのような観点で指導に取り組めばよいかについてある程度見通しを持ちやすくなった。また、指導事例をピクトグラムの観点に沿って整理し、授業者がどのように指導したか、その指導方法・技術を蓄

積することができた。しかし、聴覚障がい教育において、どのような指導が児童の三つの学びを促し深めていくのか、まだ試行錯誤中である。そのため、来年度も引き続きピクトグラムの観点を指導案に盛り込み、研究授業を全教員で取り組んでいきたい。そして、この2年間の研究を踏まえ、児童の三つの学びの達成につながるような指導について考えていきたい。

資料1 独立行政法人教職員行政機構よりアクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
 興味や関心を高める	 互いの考えを比較する	 思考して問い続ける
 見通しを持つ	 多様な情報を収集する	 知識・技能を習得する
 自分と結び付ける	 思考を表現に置き換える	 知識・技能を活用する
 粘り強く取り組む	 多様な手段で説明する	 自分の思いや考えと結び付ける
 振り返って次へつなげる	 先哲の考え方を手掛かりとする	 知識や技能を概念化する
平成31年度 研究活動資料	 共に考えを創り上げる	 自分の考えを形成する
	 協働して課題解決する	 新たなものを創り上げる

出典



独立行政法人教職員支援機構

資料1 (B 指導略案)

□□学習指導略案

指導者 (T1) □□ □□
 (T2) □□ □□
 (T3) □□ □□

1. 日 時 平成□□年□月□日 (□) 第□限 (□□ : □□ ~ □□ : □□)

2. 学年・組 小学部□年 (A児、B児)、□年 (C児) <□人>

3. 場 所 本館□階 □年□組

4. 単元名 「□□□□」【題材『 □□□□ 』】

5. 単元目標

- ・ □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□。
- ・ □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□。

6. 指導計画と評価の観点

次	時	学習内容	評価基準 (評価方法)							
			関	思	技	知	A児	B児	C児	
2/5	5/12									

◎…めあて 関…関心・意欲・態度 思…思考・判断・表現 技…技能 知…知識・理解

7. 児童の実態と個別の目標

	実態	つけたい力
A児		
B児		
C児		

資料2 (アドバイスシート)

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 () 授業者()

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

チェック項目		✓	チェック項目		✓
1	児童は、授業の準備（教科書など）ができている。		11	明確でわかりやすい指示や説明をしている。	
2	安心して授業に集中できる雰囲気がある。		12	児童に顔や口が見えるように注意している。	
3	私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		13	児童に伝わりやすい方法（手話、指文字、音声など）で表現している。	
4	事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		14	板書をわかりやすく工夫している。	
5	互いの顔が見えるような机の配置になっている。		15	考えを発表したり書いたりする場面を設定している。	
6	指導案が適切に作成されている。		16	児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。	
7	導入を工夫している。		17	教材やワークシートを適切に活用している。	
8	めあて（目標）を提示している。		18	児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。	
9	時間配分がうまくできている。		19	適切に授業のまとめをしている。	
10	話す速さが適切である。		20	T T（チームティーチング）を適切に活用している。	
項目	内容		評価	アドバイス（気づいたこと）	
主体的な学び	1	興味や関心を高める			
	2	見通しを持つ			
	3	自分と結び付ける			
	4	粘り強く取り組む			
	5	振り返って次へつなげる			
対話的な学び	1	互いの考えを比較する			
	2	多様な情報を収集する			
	3	思考を表現に置き換える			
	4	多様な手段で説明する			
	5	先哲の考え方を手掛かりとする			
	6	共に考えを創り上げる			
	7	協働して課題解決する			
深い学び	1	思考して問い続ける			
	2	知識・技能を習得する			
	3	知識・技能を活用する			
	4	自分の思いや考えと結び付ける			
	5	知識や技能を概念化する			
	6	自分の考えを形成する			
	7	新たなものを創り上げる			

記入者 ()

総合学習における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

中学部

はじめに

平成30年度より「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み」を全校テーマに、2年計画での研究が進められている。昨年度の中学部研究では、中学部に在籍する生徒を念頭に「中学部の生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは」何なのかを考え、中学部教員の意見を記録していく取り組みを進めた。

その結果、「主体的」な授業作りの達成には、少し難しい設問を使うことで生徒に考えさせる時間を作ること、生徒が考えたいような発問の準備、が大事にされていることがわかった。また、「対話的」の項目では、生徒同士の話し合い場面の設定が重要視されており、そのためにグループワークなどの活用が求められている。手話を学習段階にある新転任教員はもちろん、それ以外の教員も「対話的」に授業を進めるための方策として、ICT機器を取り入れながら視覚的手段を効果的に使用することが考えられていた。最後に、「深い学び」の達成には、授業で学んだ知識を実際の生活で使えることが大事だと考えられ、したがって授業では、理解した事柄を他の人に伝えることや説明できることが「深い学び」の目安として期待されていた。

1 研究の目的

今年度の中学部研究では、総合の授業を通して主体的・対話的で深い学びに向けた授業作りを実践する。その実践の中で、生徒たちに見られる肯定的な変化、または否定的な変化の把握を目的とする。また、生徒たちの変化の要因が何なのかも検討する。

2 研究方法

中学部生徒を対象にアンケート調査を行った。アンケートは「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、四件法（A:当てはまる B:どちらかといえば、当てはまる C:どちらかといえば、当てはまらない D:当てはまらない）を用いた。質問の詳細は表1の通りである。総合の授業実践前後の変化を見るために、同じ内容のアンケートを2回（7月と9月）行った。なお、1年生と3年生は「防災」を、2年生は「防犯」をテーマにし、「調べ学習」「話し合い」「発表準備」「発表」という活動を学年ごとに行った。

表1 質問項目の詳細

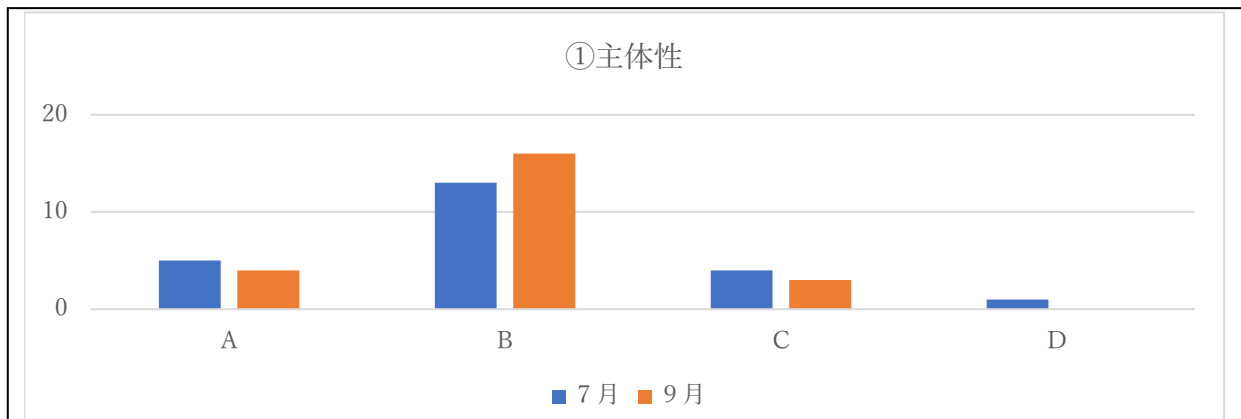
①	先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題に対して、自分から取り組み、積極的に考えようとしている。
②	先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題について、友だち同士で話し合うと、解決するためのアイデアが出やすい。
③	先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題について、友だち同士で話し合うと、自分の考えが広がる。
④	話し合うだけでなく、まとめて発表まですると、その課題についてより深く学ぶことができる。

3 結果と考察

質問①は「主体性」、②は「対話」、③は「対話から深い学び」、④は「発表から深い学び」にそれぞれ関連している。調査結果は次のようになった。

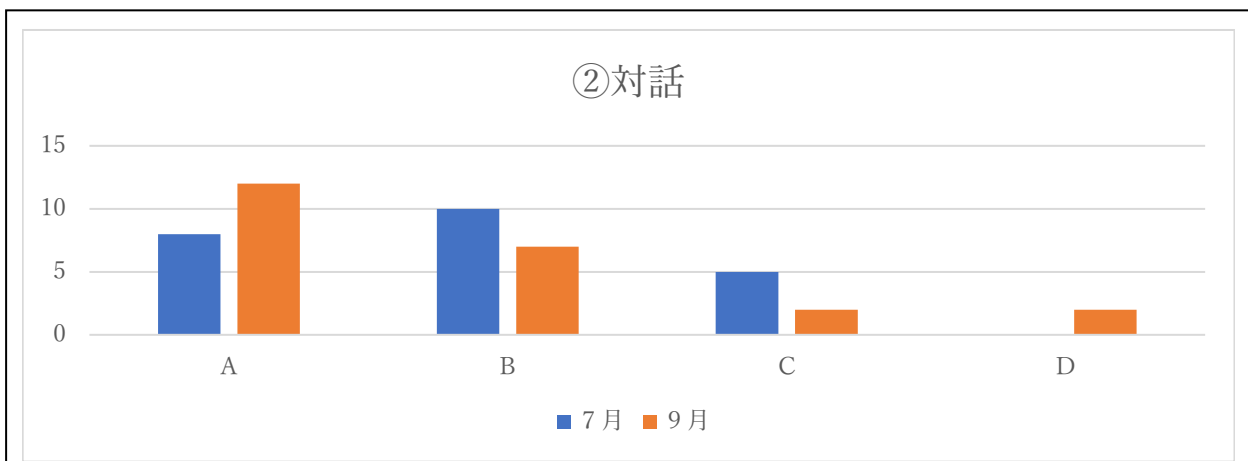
①「主体性」:先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題に対して、自分から取り組み、積極的に考えようとしている。

	当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまらない	当てはまらない
7月	5	13	4	1
9月	4	16	3	0



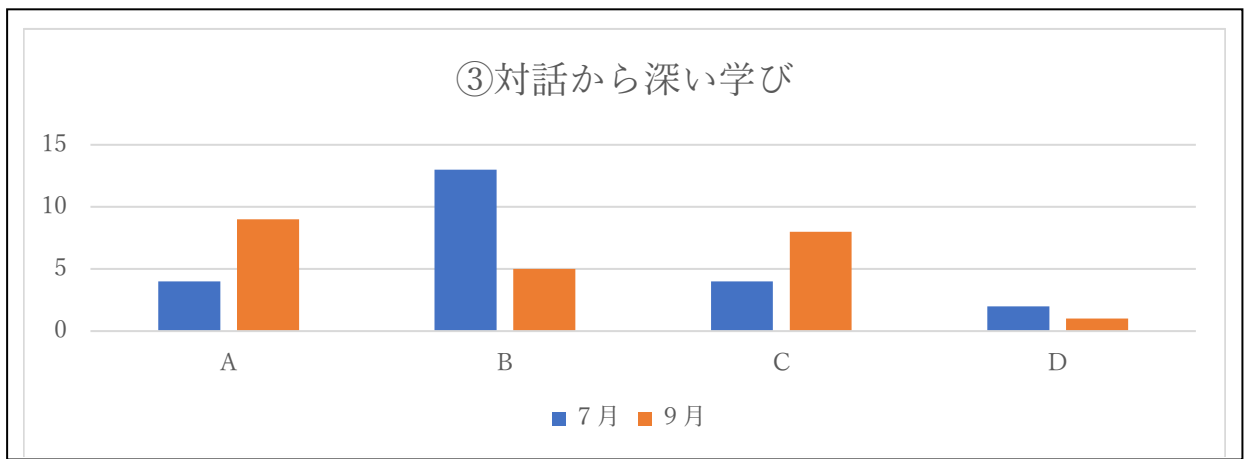
②「対話」:先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題について、友だち同士で話し合うと、解決するためのアイデアが出やすい。

	当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまらない	当てはまらない
7月	8	10	5	0
9月	12	7	2	2



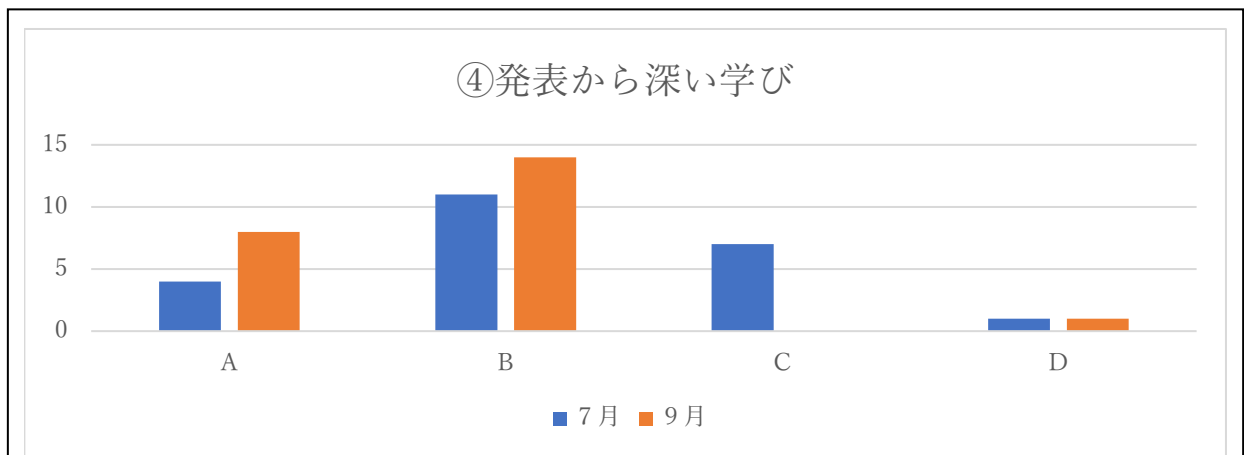
③「対話から深い学び」:先生から出された課題や、自分たちで相談して決めた課題について、友だち同士で話し合うと、自分の考えが広がる。

	当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまらない	当てはまらない
7月	4	13	4	2
9月	9	5	8	1



④「発表から深い学び」：話し合うだけでなく、まとめて発表まですると、その課題についてより深く学ぶことができる。

	当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまる	どちらかといえ ば、 当てはまらない	当てはまらない
7月	4	11	7	1
9月	8	14	0	1



質問①[主体性]については、7月と9月の結果にそれほど変化はなかった。質問②[対話]については、A[当てはまる]に4名の増加があり、話し合い活動が問題解決への手がかりとなることがわかる。

質問③[対話から深い学び]については、A[当てはまる]が増えた一方で、C[どちらかといえば、当てはまらない]も増えた。より詳細に見ると、7月アンケートでB[どちらかといえば、当てはまる]と答えた9人のうち6人が、9月アンケートではA[当てはまる]に変化していた。残りの3人はC[どちらかといえば、当てはまらない]に変わっていた。つまり、総合での取り組みにより、対話することが深い学びにつながると、より思うようになった生徒も、やや思わなくなった生徒も同時に増加した。この要因を考えるため、次に生徒が記入したコメントから考えられることをまとめる。

より肯定的になった生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちに教えてもらおうとアイデアがしやすい。 ・自分が思いつかなかったことを聞いて、「なるほど」と思い、考えが広がった。 ・より良い意見やアイデアが出る。 ・色々な意見、考えを知れた。
否定的になった生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・意見があわなかった。 ・考えが広がらなかった。 ・インターネットで調べる。

より肯定的になった生徒の例からは、対話することで自分とは違う意見やアイデアと出会い、それが自分の考えの広がりにつながるということがわかる。課題解決のための対話は、この点で深い学びに貢献できる。

反対に、否定的になった生徒の記述からは、話し合い活動を進めるうえので課題が把握できる。否定的になった生徒たちは当初（7月アンケート結果）、「自分の考えが広がる」「違う意見を聞いて考えがまとまる」と思っていたが、友達との話し合い活動後に、上記のように否定的な感想に変わった。活動中に、意見が上手くまとまらないこと、よい解決策に結びつかないことを経験したのだと推測される。ここからは、「対話」を「深い学び」につなげるためには、先生が対話場面を見守りながら、好奇心や興味をさえぎらずに引き出していくテーマ設定などが必要となる。

質問④[発表から深い学び]については、肯定的な変化が起きていた。発表活動の後、発表することが深い学びにつながると考えた生徒（A[当てはまる]・B[どちらかといえば、当てはまる]）が増え、つながらないと考えた生徒（C[どちらかといえば、当てはまらない]・D[当てはまらない]）は増えなかった。一例をあげると、取り組み前は「発表してもしなくても変わらないと思うから」という理由でD[どちらかといえば、当てはまらない]だった生徒が、発表活動後には「発表するために調べることによって、深く学べるから」という理由でB[どちらかといえば、当てはまる]に変化した。他の肯定的な理由を見ると「まとめて発表した方が勉強になる」「今までのことを振り返ることができる」「色んなことが分かって、色んな考えがあって学べた!」のような記述があった。

発表活動が深い学びにつながると考える生徒のこれらのコメントを読み解くと、発表時点での学び以上に、発表にいたるまでの活動で学んだことの多さに気づかされる。ここから言えることは、「発表」そのものよりも、「発表までの過程」に深い学びにつながる要素がちりばめられている、という考察である。

ただし、発表活動の結果、否定的な評価をした生徒（D[当てはまらない]）がいることも忘れてはならない。この生徒は「発表したらそれで終わり」という短い記述を残しており、事後学習や振り返り活動の大事さを教員側に再確認させるものである。

4 まとめと今後の課題

今年度の研究では、防災と防犯をテーマにした総合の授業で「調べ学習」「話し合い活動」「発表準備」「発表」に取り組んだ。今回のアンケートからは、「発表」を見すえた話し合い活動や発表準備活動のなかで必然的に生まれる「対話」は考えの違いを知ることにつながり、自分の考えを広げられる点で、深い学びに貢献することがわかった。さらに、認め合うことにつながるよう取り組んでいくことが不可欠である。しかし、対話に意義を見出さなかった生徒もおり、教員が対話場面を見守りながら、好奇心や興味をさえぎらずに引き出していくことが必要であるとした。次に、「発表」までの過程で「調べること」「他の人の意見や考えを知ること」ができること、「それまでの学びを振り返り」「考えをまとめること」ができ、学びが深まるとわかった。

課題として、今回の研究ではどの取り組みが、どう変化を与えたのかまではわからないこと、学年・学力・きこえの状態など生徒の属性を考慮に入れていないことがあげられる。そのため、今回の研究結果から、「発表」が深い学びにつながると安易に考えてはいけないうちに留意する必要がある。また、発表までのプロセスは学びにつながったが、発表内容の積極的な評価や改善点について話し合える場を設定し、次の発表が改善されるよう導く必要もあると考える。

【アクティブラーニングの視点を取り入れた教科指導について：国語科（百人一首大会）】

高等部

1. はじめに

2022年度から施行される新学習指導要領（国語科）への改訂の背景について、以下のものが挙げられる。（1）教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視されていること、（2）文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、（3）多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、（4）古典に対する学習意欲が低いこと、の4点である。

これらの課題の中でも、特に（4）の「古典についての関心・意欲を育むこと」を高等部国語科の研究活動の中心に据えた。なぜならば、次期学習指導要領において一新される国語科のどの科目についても、「我が国の言語文化に関する事項」が要点として設定されているからである。また、同時に「生涯にわたって古典に親しむ態度」を養えるのではないかと考えたからである。そこで、本年度からの試みとして「百人一首・カルタ大会」に向けた授業を計画し、実践することにした。

2. 授業の流れ

（1）授業計画

まず、今年度設定した研究課題の目的として、「百人一首に触れることで、我が国の古典文化に興味・関心を持つ。」ことと、「カルタ作成から競技体験を通して発想力を育み、季節の文化的行事を楽しむ。」ことの2点に絞り、案を具体化していくことにした。ここには、発達段階に応じて皆が取り組めるようにという意図が込められている。また、新元号に『万葉集』由来の令和が採用された背景も相まって、全員参加形式のチーム対抗カルタ大会を1月の高等部行事に組み込んだ次第である。授業時においては、知識・内容理解としての「和歌・カルタ学習」の段階を越え、子ども同士が積極的に協働しながら習得・活用を目指すと同時に、先人の感性（思想）を手掛かりに自己の考えを広げ深める、という「アクティブラーニング」の視点を共通認識とした。以下、10月から1月までの授業実践について報告する。

（2）授業実践

今回「百人一首・カルタ大会」を実施するにあたって、生徒会の協賛も得られたことで、団活動（全学年の生徒を4色の団に分け、異学年交流として行事に取り組む活動）に反映する流れとなった。そうすることで、授業時にいくつかの学習グループが合同で競技の練習ができたり、団員の強みや個性を認め合いながら、行事の真剣な取り組みにつながられたりするといった教育上の効果が得られると考えたからである。

①10月【百人一首を通じた文語の決まり・古典特有の表現の基礎を学ぶ時期】

まず、高等部本科総合・専門コースの1年生に関しては「国語総合」の時間を利用して、歴史的仮名遣いや品詞分類について、より実践的に知識を整理することができた。また、古典の苦手意識が強い生徒に対しては、1枚でも多く札を取れるように「一字きまり」の札を中心に解説したり、自身の「お気に入りの札」を紹介させたりとゲーム感覚を取り入れた指導を行った。さらに、特進コースの生徒においては「古典 B」の時間を利用して、掛詞や歌枕などの特有表現、および作者の生活背景などにも迫ることで、文化的背景について理解を深めていった。

②11月【生活応用コースの生徒によるカルタ作成】

次に、生活応用コースについては五十音図の「あ行～わ行まで」を2行ずつ5、6人の生徒で分けて「あいうえおカルタ」の作成に取り組んだ。このとき、D①・D②グループで共同でカルタを作ったが、D①グループから先に好きな絵と字を選んで書いてもらい、残った文字を習熟度の高いD②グループに考えて書いてもらう形で展開した。また、D③・D④グループでは、iPadを一人一台配ることで、インターネットを利用して生徒たちが主体的にその文字に合ったキャラクター

や情景を描くという形で進めていった。このように、生活応用コースでは生徒たちの自由な発想を大切に、身近な生活現象を絵とことばで表現する時間を多めに設定した。

③ 1 2 月【異学年どうしによる合同練習会の実施・冬休みの課題】

最後に、まとめの時期に入るとより実戦形式に近い取り組みを展開した。授業時には学年の枠を越えて、3つの学習グループが合同で練習会を行った。学習グループの習熟度に関わらず、和歌のリズムを楽しんだり、古典と現代の世界に通じるものを感じ取ったりしていた生徒たちは、早い段階で積極的に札を探そうとする姿勢が見られた。

また、冬休みの課題の中にも「下の句を100首すべて書く課題」や「いくつかの和歌をジャンル別に分ける課題」などを付し、年始（百人一首大会の当日）の校内SPIテストでは、最終確認のために文学史として数問出題した。

④ 1 月【百人一首・カルタ大会当日】

当日、「百人一首」側は4人一組の形を2面展開で、1試合15分間を4回実行した。このとき、PowerPointを用いた視覚支援を取り入れることで、できる限り負担なく札の取れる環境を整えた。「カルタ」側も百人一首と同じ形式・時間で進行した。ホワイトボード上に、ゆっくりとひらがなを書き表すことで、生徒たちも自作の札を楽しそうに探すことができていた。事前に、各団でどこに誰が参加するのかを決めた上での本番であったので、比較的スムーズに運営することができたように思われる。

最後に、全員の取った札数を各4団の得点に反映させた。また、翌週の生徒朝礼では獲得数上位の3名を表彰し、達成感を持たせた状態で行事を終えることができた。



生活応用コースの生徒作（カルタ）



百人一首大会当日の様子

3. 成果と課題

今回、国語科と生徒会合同で「百人一首・カルタ大会」という一つの行事を運営したのは、初の試みであったが、その分教員や生徒からの反響も多く得ることができた。実施後の教員アンケートの中には、「単一生も生活応用生も皆で楽しめたところが良かった。」「過去のスピーチ大会よりも良かったと思う。」「楽しそうにしている生徒がたくさんいたので、次年度も開催すべきと思う。」などの意見があったので、一定の成果があったのではないだろうか。また、生徒の姿の変容としては、「以前よりも古典の世界に少しでも馴染もうという態度」、「自札の獲得による、チームへの貢献心や学びの充実感」を準備段階から徐々に観察することができた。

今後の課題としては、一つは授業内で準備に必要な時間をいつ、どのように確保するのかという点を考えることが挙げられる。もう一つは、行事を終えた後も、生徒たちが「古典文化・季節の伝統行事への関心」を継続して持てるように、「習得→活用→探求」に至る授業改善をいかにやっていくのかという点を意識していくことが挙げられる。次年度以降もこの反省を活かして、よりよい授業実践につなげていきたい。

1. はじめに

理科の学習において、生徒自ら身の周りの科学に疑問や関心を持ち、そこから課題を設定して結果を導くことは、科学的に探究する能力と態度、また創造的な思考力を育くむことにつながる。

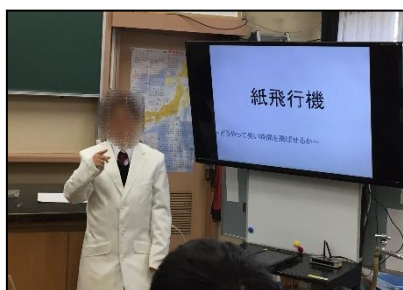
今回、本科3年生の“物理基礎”において、水中における「浮力」の単元を学習した際、生徒から「では、飛行機はなぜ空間に浮かぶのか」という疑問が出された。これをきっかけに、紙飛行機や飛行機の翼模型を製作し、実験などの探究活動を通して“飛行機が空間に浮かぶために必要な力”について考え、先に述べたような能力を育む授業を展開し実践することにした。

2. 授業の流れ

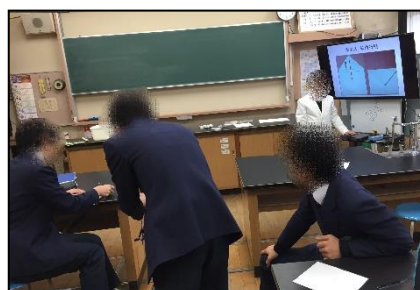
① 小さな頃から身近な存在である“紙飛行機”を作って飛ばし、空間に浮かぶ不思議さを確認させる。

② 生徒の「もっと滞空時間を長く。」という思いから、生徒が調べた内容をプレゼンテーションで発表させ、“翼の形を変化させる”、“折り曲げ方を工夫する”などして、長くまた高く飛ばせる紙飛行機の製作に取り組ませる。

翼の大きさ、形、そらせ方、投げ方、投げる方向などの試行錯誤を繰り返し、長時間飛ばそうとする探究活動が見られた。



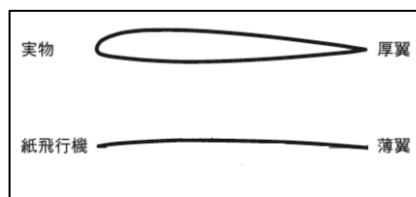
生徒によるプレゼンテーション



紙飛行機の製作

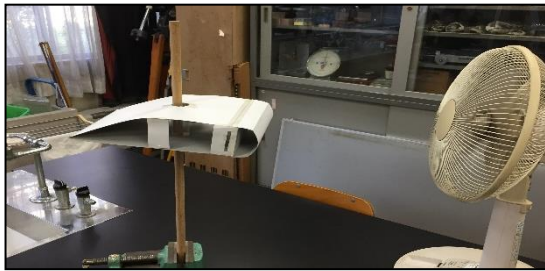
③ 「実際の飛行機の翼の形状や仕組みはどうなっているのか調べたい」という思いから、生徒どうしの話し合いの後、インターネットを利用して飛行機の翼について調べ学習に取り組ませる。

多くの翼に関するサイトの中から、翼にはさまざまな形状があると知り、飛行機を飛ばすためのより良い形状の研究がなされてきたことも知った。



調べた資料の例

- ④ 翼の模型を試作し、実験を通して揚力について理解させる。



製作した翼模型

- ⑤ 市販の模型飛行機を飛ばし、飛行機の翼の揚力を確認させる。



3. 成果と課題

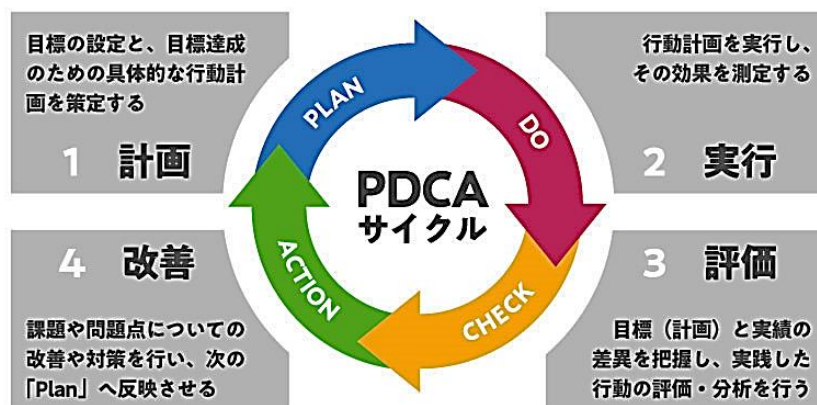
“物理基礎”において、水中における「浮力」の単元を学習した際、生徒が「飛行機はなぜ空間に浮かぶのか」に疑問を持ち、自ら興味を示すことができた。

飛行機は、なぜ浮くことができるかをテーマに、まず身近な紙飛行機を作製することにした。長く飛行することを目標に、生徒同士が話し合い、インターネットで調べ学習を行い、“翼の形を変化させる”、“折り曲げ方を工夫する”に着目し、長く飛行する紙飛行機の作製に取り掛かった。作製の手順などを、視覚教材 (PowerPoint) を活用し、発表することも行った。作製した紙飛行機をどこまで長く飛行させることができるかの実験も生徒どうし、改良しながら行われた。その中で、長く飛行することは、下からの空気が押す力に関係があると考え、風に押される翼の形状や仕組みはどうなっているのかと疑問を持った。飛行機の翼の模型を試作し、扇風機の風を当てる実験を行い、翼が揚力を受けて、どのような状態になっているか理解することができた。また、市販の紙飛行機を用いて、飛行機の翼の形を変えて飛ばすことで、揚力のしくみをより理解することができた。

しくみを理解するために、話し合いを行い、調べ学習を教科書やインターネットを使用し、視覚教材 (PowerPoint) を用いて、論理的に発表することができた。また発表中に質問の機会を作り、課題を見つけ、次は、どうしていけば良いか試行錯誤をし、探究を積み重ねる力を身に付けることができた。課題

に対して、どのような手順で取り組みばよいか自主的に作製し、実践を行い、課題を見つけ、もう一度考えて取り組む PDCA サイクルを行えた。また、理科研課題のように、高等学校における理科の学習成果を踏まえ、生徒の興味・関心等に応じた科学に関する課題を設定し、観察、実験などを通して主体的に研究を行い、その過程において科学的に探究する能力と態度の育成を図るとともに、研究における創造性の基礎を育むという成果が得られた。

今後の課題は、限られた時間を効率よく使いながら、生徒たちのアクティブラーニングを促す支援が必要であること。そして、生徒から次々と質問や疑問が出てくるので、解決させるための時間設定が難しいことである。



『自分の命を自分で守る行動』を共に考える ～日常生活の中で防災・防犯意識を高めるために～

寄宿舎

1. はじめに

昨年度からの全校研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの実現にむけての取り組み」と寄宿舎の研修テーマである「伝えたい思いがふくらむ実践 ～自ら考える生活づくりとは～」を意識し、様々な取り組みを行ってきたが、その中の一つである『安心・安全な寄宿舎づくり』を目的とした取り組みを紹介する。

本校はSPS認証をめざし、PJを組織して取り組みを始めた2017年度から寄宿舎内でもより安心・安全を心掛けるように職員の意識が変わってきた。寄宿舎という泊を伴う環境であり、夜間は3名の宿直職員だけでの対応となり、非常災害時の避難誘導や不審者対応、通報や病院引率まで多岐にわたる行動を3名で行う必要がある。そういった現状を踏まえ、大人の手助けがない状況下でも「自分の命を自分で守る行動」を舎生自身が行えるよう、舎生自身の防災・防犯意識や知識・技能を高めることが喫緊の課題であると考えた。学部での教育や様々なメディアからの情報、自身の体験の中で舎生自身が既に防災・防犯の意識を持っている。自治会などの話し合いの場をきっかけとし、舎生自身が考え、仲間と話し合い、共有する機会を作ってきた様子をまとめた。

2. 自治会での取り組み

(1) 自治会① 平成31年1月28日

① 自分で考えたことを発表する

各班で防災に関連することを、思いつくまま付箋にどんどん書いていく「ブレインストーミング」の方式で模造紙にまとめ、発表しあった。職員の予想を超え、大阪北部地震や2018年台風21号の体験を語る舎生がおり、「川の水がどんどん増えて恐かった。川には近づいたらアカン」「地下鉄が止まってびっくりした」など舎生が舎生に話すことで話す側、聴く側が共に真剣に考える機会となった。



② 避難訓練前に意識すること

避難する時に大切なことの中で、「今回の避難訓練で特に自分が意識したいこと」を（姿勢を低くする・ハンカチで口を押える・走らない・しゃべらない）の4つから選んでシール投票を行った。シール投票後、なぜ、自分がそれを選んだのかの理由を班で述べあい、「全部大切、一つを選ぶことは出来ない」などの意見も出て、自分たちで考える機会となった。

(2) 自治会② 令和元年10月1日

① 「緊急地震速報」を知っていますか？

緊急地震速報の説明を行い、オンテナをスマホの地震速報に見立て、振動中は緊急地震速報が来ていると仮定すると説明し、地震が来るまでにできることは何かを考えようと伝えた。



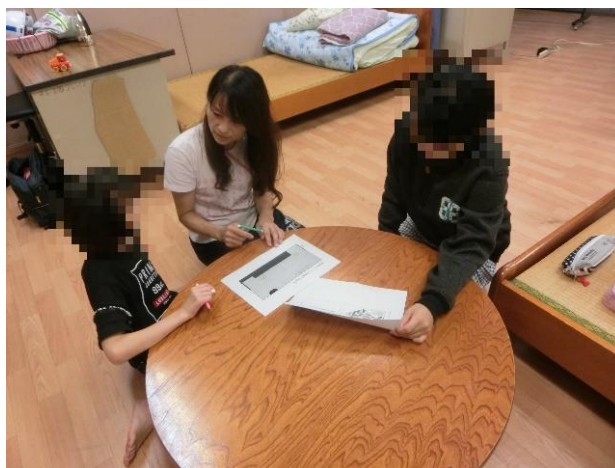
②「安全姿勢」を学ぼう

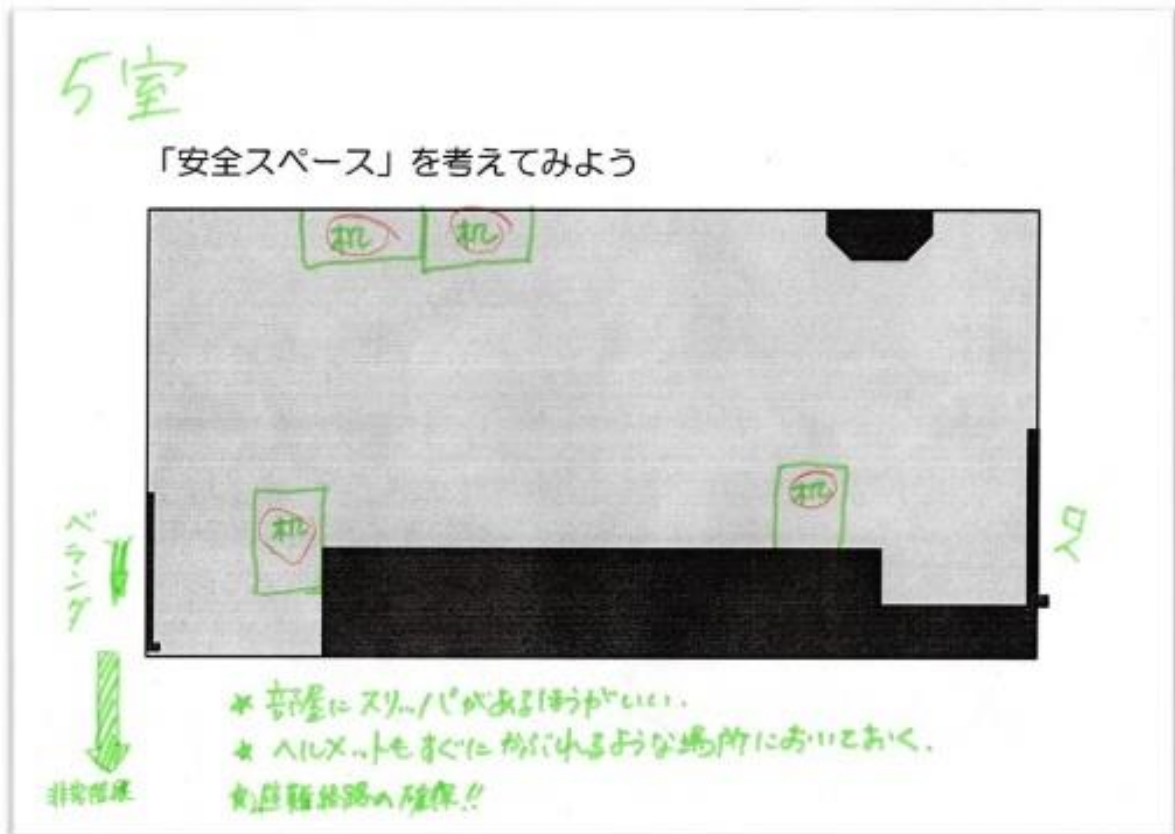
- ア 地震の揺れで倒れないように、その場から動かされないようにするため、姿勢を低くする。しゃがみこみや体育座りは不安定なので両手両膝を床につける。
- イ 頭を守りながら、丈夫な机の下など安全な場所に避難する。机など隠れる場所がない場合は、手や腕、カバンや本など、身近なもので頭を守る。
- ウ 揺れている間に動くのは危険なので、揺れが収まるまで、1分くらいその場で動かないようにする。



③「安全スペース」を探そう

部屋に移動して、ロッカーが倒れても危険がない場所や、蛍光灯が落ちてきても怪我をしない場所を確認した。実際にロッカーを倒してみても、危険な範囲がどの程度なのかを確かめた。また部屋の見取り図に安全な場所、危険な場所の書き込みを行った。その際に安全な場所の情報だけでなく、避難する際に気づいた点などを意見として発表する舎生がおり、安全に対する意識が高まっているのを感じた。





その後の一時避難訓練では、オンテナの振動を合図にそれぞれが安全と考えた場所に一時避難を行った。普段何気なく生活している場所で安全な場所を一緒に話し合うことで、より一層お互いに意見を出し合うことができた。

(3) 自分の身の安全を守るために必要なことを伝える

2学期の避難訓練の前に、地震の際に使用するヘルメットの顎ヒモの調整方法の確認を行った。また非常持ち出し袋の中身を自分で確認することで何が入っているかを意識させた。非常時に職員が常にそばについて手を貸せる状況にない場合を想定し、自分でできることを増やす目的で少しずつ進めている。

(4) 舎生が意見を言い、体験を述べる機会をつくる

以前は自治会の場で職員が避難訓練について、実施日時等の報告を行うのみだったが、最近では舎生自身の考えや経験を言える機会をつくるようにしている。例えば、「避難訓練で大切なこと」について職員が提起するのではなく、これまで避難訓練に参加してきて各自が大切に思っていることを発表している。舎生からは「お・は・し（おさない・はしらない・しゃべらない）が大切だと小学部の頃から言われてきた」という意見があり、職員から「本当に走らないが良いことなのか」と発問し、共に考えるようにした。また、職員による東北（東日本大震災現地）のフィールドワーク報告をした際にも、災害ボランティアとして活動した高等部舎生からも体験を語ってもらうようにした。

3. 防犯意識を高める

令和元年8月29日（木）全校で職員を対象とした防犯訓練が行われた際に、寄宿舎でも『自分の身を守ろう』と題した集会を開いた。愛知県警察のホームページを参考資料とし、不審者は見た目では判断はできないことや、知らない人に付いていけないことなど舎生が防犯について考える機会を設けた。

スライドを使った対話型のクイズ形式で話を進め、韓国（文化）が好きなAさんに「知らない人に『一緒に韓国旅行に行こう』と手を出されたらどうする？」と手を出すと、思わず手を取ってしまい、みんなから「行ったらあかん！」と止められるなどお互いに意見を出し合い、自分たちで考え、意見を言い合える雰囲気ができていた。

職員によるロールプレイを見せた後、舎生には「自分ならどんな行動をするか」を演じてもらった。「聞かせること」「教えること」に留まらない設定を行い理解が深まった。

4. 避難訓練の見直し

寄宿舍では、夜間の勤務体制のもとで舎生の安全を守ることが大きな課題であり、自然災害への備え、火災や急な体調変化、ケガが発生した時など職員だけでは対応できないケースも考えられる。特に大規模災害の発生時を想定し「舎生自身の身を守る力を高める」ことが急務であると考え、従前の訓練を見直し、「実際」を想像し企画を取り入れるよう努めた。

- ・ 夜間を想定した避難訓練では災害で停電していることも予想され、手話による指示が伝わりにくい場合を考慮して訓練を実施。
- ・ 例年、避難訓練の日時は伝えず、急にパトライトが回っても落ち着いた避難が行えるようにと考えていたが、昨年度は避難訓練の日時を伝え事前に話し合いを持つことで避難時に意識することが明確になるように意識させてみた。
- ・ 今年度、最後の避難訓練では日時を伝えず火災避難訓練を行った。そこでは火災を想定した避難訓練だったにも関わらず、パトライトが回った瞬間に机の下に隠れる舎生が何人もいた。地震・火災に見舞われた際取るべき行動についてきちんと理解していない舎生がいることがわかった。

5. 今後の課題

- ・ 防犯・防災の知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行う必要性。
⇒大阪北部地震の自分の体験を語る舎生の話や、避難訓練の際に講評の中で教頭先生から聞いた岡山ろう学校寄宿舍の火災に話など、体験・事実を基にした話を真剣に聞く姿が見られた。各舎生の実体験を聞き取る作業は、舎生自身が行動を振り返り、より最善な行動を考えるきっかけになるのではないか。
⇒「緊急地震速報」をテーマに学んだ際、オンテナを携帯電話のバイブレーションに見立てて、訓練を行ったが、自分が所有する携帯電話（スマートフォン）と結びつけることができたかが不明。実際に近い体験をさせたい。
- ・ 舎生たちが寄宿舍でのとりくみのプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにする。
⇒「物はゆれるとどう動くか」「安全な姿勢はどんな姿勢か」「安全スペース探し」「避難用ヘルメットのあご紐調整」「非常持出袋のチェックを行ない不足している物を補充する」を9月から10月の短い期間に行った。年間計画を策定し、一つひとつを丁寧にとりくむ必要がある。
- ・ 舎生に必要な力を育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視する。
⇒「物はゆれるとどう動くか」では、ペープサート（紙人形）で説明するだけに留まらず、実際に自分の居室に移動して、居室になる物を動かして確かめた。今後も身近な物、日常生活で使う物を題材にすることは大切である。
- ・ 課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習や、そのための指導の方法等を充実させていく。
⇒班会議や部屋集団での学び合いを重視。異年齢縦割りの中でそれぞれに力をつけるための工夫をしていく。

6. おわりに

舎生に「自分の命は自分で守る」意識と危険回避能力を身に付けさせる必要性を強く感じている。児童生徒を取り巻く危険に対し、確実な対応ができる安全な寄宿舍を目指し、様々な取り組みを進めているが、最後に自分を守るのは自分自身であり、次にお互いに助け合うことが必要である。

自治会の話し合い活動の中で舎生が自ら考え、自ら考えて行動できるように様々な取り組みを行ってきた。“伝えたい思い”を発信するにはコミュニケーション力が必要である。生活空間でもある寄宿舍だからこそ、一緒にテレビを見ていて災害の映像が出た際などに「自分の経験を話

す」「他の人の経験を聞く」など児童生徒自身が興味を持ったり、疑問に感じたりしたベストなタイミングで伝えることができる。設定された場面だけでなく、何気ない日常の会話から舎生同士が学びあえる生活になりつつあると感じている。

子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり

第2分科会
大阪府立中央聴覚支援学校 土口 真奈

【概要】平成30年度に「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み」という学校全体のテーマをもとに、本校幼稚部では幼児期に必要な遊びを通した総合的な指導の中で、どのような保育をめざすのかを教員間で共有し、保育の質の向上、教員の専門性の維持・向上と研究の充実に取り組んだ。その取り組みについて報告する。

【キーワード】 主体的・対話的で深い学び 保育の質の向上 教員の専門性の維持・向上

1 はじめに

平成30年4月に新幼稚園教育要領が施行された。今後の幼児教育において「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱を幼児期に培っていかなければならない。

また近年の幼稚部では複数の障がいを併せ有する幼児、人工内耳を装用している幼児等、実態が多様化していること、教員の異動が頻繁化しているために、保育及び専門性の継承が課題として挙げられる。そのため、30年度に「子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり」を研究テーマに、『幼児が自ら活動に参加し、取り組もうとする力』や『他者とコミュニケーションをとることで、子どもが考え方の幅を広げる力』を育てることをめざした。様々な保育内容で研究保育をし、教員間で研究協議を行うことで、子どもが主体的・対話的に活動できる保育を追究し、実践につなげていくためには何が必要かを考えた。

2 研究概要

本校幼稚部では、幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の観点について表1のように定義し、それをふまえて保育を行うことにした。

表1 「主体的・対話的で深い学び」の観点

主体的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが自ら活動に参加し、取り組もうとしているか。 子どもが活動の流れを理解し、活動したことを振り返ることができているか。 子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できているか。
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 他者とコミュニケーションをとることで、子どもが考え方の幅を広げることができているか。
深い学び	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できるために、教員が働きかけ、子どもが考えようとしているか。

また指導案の様式には「主体的・対話的で深い学び」に焦点があたるように、子どもの活動のなかで主体的や対話的な学びにつながるような指導を記載する欄を設けた。

3 研究方法

様々な保育内容で研究保育を行った。その後、ビデオで撮った研究保育をもとにグループにわかれて研究協議を行った。また協議した内容については、各グループが発表を行い、意見交換をした。

研究保育、協議内容の一例を表2に示す。

表2 研究保育と協議について

学年	保育内容	協議内容
3歳児	<p>内容</p> <p>自立活動 言語 『乗り物』</p> <p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> 乗り物の名前や関連することばについて学ぶ 自分の思いや考えを伝えたいという気持ちを育てる。 <p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の乗りたい乗り物を選び、発表する。 	<p>主体的</p> <ul style="list-style-type: none"> 好きな乗り物を選ぶ活動は自己選択、教員の質問内容が明確なことは自己表現につながっている。 子どもがイメージしやすく、実態に合った教材を提示したことで、活動に積極的に取り組めた。

5 歳 児	内容 製作『海の生き物をつくる』	
	ねらい ・海の生き物を自由にイメージし、試したり工夫したりしながら作ることを楽しむ。	主体的 ・自分で材料を選んだり接着の仕方を考えたりできる環境を整えることで、試行錯誤しながら取り組んでいた。 ・ことばや身振りなど表現方法を提示することで、作品に対して工夫したり、自分なりに考えたりしたことを発表できていた。
	活動 ・材料を選びながら作る。 ・作ったものをみんなで見合う。	対話的 ・子ども同士で手伝ったり、声をかけあたりしていた。 ・友だちの作品を見て、作品の良さを認めたり、話の内容に共感したりしていた。

4 成果と課題

様々な保育内容で研究保育を行い、研究協議をしたことで、教員が主体的に保育を振り返り、他の教員の気づきを自分の気づきとして取り入れることができた。その中で幼児教育において「主体的・対話的で深い学び」の視点で必要なことについて考え、整理することができた。

表3 幼児教育において「主体的・対話的で深い学び」の視点で必要なこと

- ・子どもがどこを見ているのか、何を見ているのかキャッチする
- ・教員の言葉かけ一つが、主体性を失わせてしまうこともあることを理解する
- ・子どものイメージに教員が寄り添う
- ・子どもの思考力、創造力を育むためには、教員は待つ姿勢で関わることも必要
- ・発言を他者から認めてもらえる経験が大切

また、今後も「主体的・対話的で深い学び」につながる視点をもちながら保育を行うことを継続し、教員間で意見交換を大切にして日々の子どもの関わりに活かしていこうということを共通理解した。